

川柳・洒落本にみる近世の笑い

—— 軽井沢ものを中心にして ——

島田大助

一 はじめに

色男、親父、下女、雑俳には実に多くの人々が描かれる。人々の間で作られ、人々によって読まれたこれらの一句、一句には、その時代の世相、またそこに生きた人々の息吹を感じることができであろう。句作の上でイメージが固定され後の文芸に影響を与えたものとして息子については既に論じたものがある^①。

本論考では、更に範圍を広げ軽井沢ものの川柳を端緒としながら、浅黄裏などの田舎者について考察を試みる。

二 川柳に於ける軽井沢

学者の足下。藩中の貴殿。俠者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者は拙

者なり。べい／＼詞がやむべいなら借りても三百つん出すべいと古よりの諺なり。夫レ軽井沢の地たるや。川柳伝にあらはれたる。一方の色里也。今雪国の肌を探り。飯櫃の底をはたき。大通変じて変通にいたる。浅黄の裏の裏のうら。紺の布子に白あがり五所紋あり／＼と。かきしるしたる此一巻。あまねく世上にうり詞として。その買ことばをまつはたそ。山の手の馬鹿人なり

(『軽井道中粹語録』序)^②

中山道の宿場町軽井沢を舞台とする『軽井道中粹語録』は江戸及び、江戸近郊の遊郭を主に扱う江戸洒落本の中では異色の作品と言えよう。山の手の馬鹿人の自序に「夫レ軽井沢の地たるや。川柳伝にあらはれたる。一方の色里也」とあり、川柳の影響は大きかったと思われる。『黄表紙・洒落本の世界』^③に於いて、水野稔氏は「今までいくつかの川柳をも引用したが、この作品は

地方遊里の穴場ともいふべき軽井沢についての、知る人ぞ知る特異な習俗の知識を適当に按排してつくり上げたもので、かならずしも作者は実地探訪見聞によるものとはいえない」とされる。

では、当時の人々の共通の認識となっていた軽井沢とはどういったものであったのであろうか。「夫レ軽井沢の地たるや。川柳伝にあらはれたる。一方の色里也」という『茶話道中粹語録』という娼捨山人の序に導かれて、『川柳評万句合勝句刷』⁽⁴⁾の中から軽井沢に関する句を検討していく。

- 1 かるい沢あかねをだてのしきせにし
(似合い社すれく) 宝十三・桜・二二
茜色に染めた安価な木綿の着物を晴れ着として御仕着にする、軽井沢の風俗を句に仕立てたものである。
- 2 五月女をすゝいでは出ス軽井沢
(おし付ケにけりく) 明元・礼・壹
先程まで田植え仕事をしていた女を飯盛女郎として出す軽井沢の宿場である。軽井沢は高冷地にあるため、実際には水田はほとんど存在していなかったようであるが、中山道の宿場女郎の雰囲気を感じさせられる句である。
- 3 かるい沢又といふ氣のないところ
(こみ合にけりく) 明二・仁・四
軽井沢はまた訪れようという気が起こらない、そんな宿場町である。あるいは、軽井沢はまた訪れて欲しいとは思わないほど栄えている宿場である。
- 4 あかね裏うすいの山へ野かけに出
(首尾の能ことく) 明二・仁・五
茜色の木綿の着物を着た女(遊女)が、碓氷峠へ野駆けにでることだ。
- 5 袖とめにぼた餅をするかるい沢
(こみ合にけりく) 明二・仁・四
袖留めの祝いに、ぼた餅を振る舞う、大食いが沢山いる軽井沢である。
- 6 かるい沢女めうりのつきた所
(ふくれこそすれく) 明二・礼・六
軽井沢は女性にとつて幸せがつきた場所である。
- 7 かるい沢御しよくと見へて百人首
(あつまりにけりく) 明三・満・三二
軽井沢の最高位の遊女であろうか珍しくも百人一首をとつている。
- 8 かるい沢膳のなかばへすゝめに來
(たつね社すれく) 明三・宮・三二
軽井沢の飯盛女郎らしく、給仕の間に夜の勤めの誘いにやつてきた。
- 9 山越シに蔵かへをするかるい沢
(かるひことかなく) 明三・桜・六
鞍替えするにも山越えて行う軽井沢である。碓氷峠

を控えており、鞍替えするにも、山越えになる、軽井沢の立地条件を読み込んだ句である。

10 そこ豆て居つゞけを打ツかるひさわ

(かきなりにけりく)

明三・松・五

足の裏に出来た豆のために居続けを行う軽井沢である。江戸の雨や雪による居続けとは違った宿場町ならではの句である。

11 かるい沢しやつちらこわい袖をふり

(ところくくに)

明三・仁・三

軽井沢の飯盛女郎は粗末な着物の袖を振ってお客を見送ることだ。粗悪な木綿製の着物を着、客の出入を見送る姿か。

12 大一千座野等をたつねるかるい沢

(ところくくに)

明三・仁・六

大一座の宴会で、田畑の話に花が咲く軽井沢である。田舎らしく話題は田畑のことについてである。

13 地の客て追ひ焚をするかるい沢

(ところくくに)

明三・仁・七

信濃者のおお飯ぐらいの客が来ると、用意していた食事が不足してしまい追加の食事を用意しなければならぬ、そんな軽井沢である。

14 四会目を四くらといふハかるい沢

(もらひ社すれく)

明三・義・五

四会目を四くらという軽井沢である。田舎言葉で話

す、軽井沢の宿場女郎。

15 袖留メをひがんでのばす軽井沢

(はたらきにけりく)

明四・満・三

袖留めをしたのをひがんでのばしてしまう軽井沢の飯盛女郎である。

16 とうりうを居つゞけといふかるい沢

(おかしかりけりく)

明四・宮・四

逗留のことを居続けという軽井沢である。宿場町ということもあり、連泊は逗留と言うべきであるが、江戸の遊郭風に居続けというのはおかしいことだ。

17 かるい沢太夫ばんぎをくゆらせる

(おちつきにけりく)

明四・梅・五

軽井沢では太夫クラスの飯盛女郎が番煙管を用いたバコをくゆらせている。似つかわしく落ち着いた雰囲気である。

18 そばはたけどらに打タせる軽井沢

(よくばりにけりく)

明四・松・六

どらをうたせて、蕎麦畑を手放させる軽井沢である。江戸では家蔵を手放すことになるのであろうが、軽井沢だけあって蕎麦畑を手放させる、そんな飯盛女郎たちである。

19 のんひよこな地廻り来ルかるい沢

(てうと能ことく)

明四・仁・七

まぬけな地廻りがやってくる軽井沢である。

20 心中を山犬の喰ふかるいざわ

(いとしかりけりく 明四・義・拾)

心中者を山犬が食べてしまうそんな山奥の軽井沢である。

21 かるい沢犬すがききひくところ

(おしわけにけりく 明四・礼・八)

軽井沢では田舎女郎が清掻きを弾いている、そんな場所である。

22 客か来て立白のやむかるい沢

(せいを出シけりく 明四・智・六)

客がやってきて、餅などをつくことをやめる、軽井沢である。

23 むりやだあんのこつたとかるい沢

(はこひ社すれく 明四・智・六)

メリヤスを何のことだと尋ねる軽井沢である。メリヤスのことを全く知らない飯盛女郎の田舎言葉での受け答えが笑いを誘う句である。

24 かるい沢むくつげなくもおもしろし

(はこひ社すれく 明四・智・七)

軽井沢は野暮で、風流でないところがかえって面白い。居つゝけへほた餅を出すかるいざわ

25 居つゝけへほた餅を出すかるいざわ

(このミ社すれく 明四・信・四)

居続けする客にぼた餅を振る舞う、大食の土地柄らしい軽井沢である。

26 あぶれたハ麦めしを喰かるい沢

(はつかしむことく 明五・天・二)

仕事にあぶれた飯盛女郎は麦飯を食べさせられる軽井沢である。あるいは、相手をしてくれる飯盛女郎がいなかった客は麦飯を食べるの意か。

27 居つゝけに芋めしを喰ふかるいざわ

(しつかなりけりく 明五・満・三)

居続けをする客が芋飯を好んで食べる軽井沢である。さわきにハ麦哥の出るかるいざわ

28 さわきにハ麦哥の出るかるいざわ

(めつたやたらにく 明五・宮・三)

江戸とは違い一座の騒ぎに麦歌(農業歌)が歌われる軽井沢である。

29 麦秋に書出しを遣ルかるいざわ

(たまり社すれく 明五・梅・四)

盆・暮れではなく、麦の収穫期に書き出しを送る軽井沢である。

30 うけ出して鈴をふらせるかるいざわ

(いらぬものなりく 明五・梅・四)

身請けした飯盛女郎に馬の世話をさせる軽井沢である。鈴を振らせるで男女の交わりの意もあるか。

31 割りどこに戸板なそ出すかるいざわ

(つかも無イことく 明五・桜・五)

割床に衝立ではなく、戸板などを使う軽井沢である。関守りの折りふし通ふかるいざわ

(なかめ社すれく) 明五・仁・四)

関所の役人も時々訪れる軽井沢である。

うけ出シてはたを折らせるかるい沢

(いさミ社すれく) 明五・仁・四)

身請けした飯盛女郎に機織り仕事をさせる軽井沢である。

女房の目をくわでぬくかるい沢

(のそミ社すれく) 明五・礼・四)

女房を目を抜くにも鉞を用いる軽井沢である。

江戸衆ハ数かいけぬとかるい沢

(めつそうなことく) 明六・仁・四)

江戸の人は何回も出来ないねと言う軽井沢の飯盛女郎たちである。床での精力のない江戸者を馬鹿にする軽井沢のたくましい飯盛女郎たちの姿である。あるいは、江戸者はたくさんのぼた餅を食べることができないの意か。

芋をうんで居ルのをといふかるい沢

(引ツ張りにけりく) 明六・仁・四)

芋をうんで居るあの飯盛女郎をと指名する軽井沢である。

霜よけをよこつけにするかるいさわ

(きうくつな事く) 明六・礼・五)

寒さよけの霜よけを横付けにする軽井沢である。

かるい沢彦三頭巾をかたるなり

(かりそめの事く) 明六・鶴・三)

軽井沢でその場限りに彦三頭巾を語ったことである。

かるい沢たまこのせいをぬくところ

(ましり社すれく) 明七・梅・三)

軽井沢は卵を食べて付けた精力を抜くところである。

そはかきをおこりなさいとかるい沢

(心得て居るく) 明七・桜・三)

蕎麦搔ぎを奢つてくれとねだる軽井沢である。

はたおらぬよめん女かるい沢のなり

(用に立ちけりく) 明七・松・三)

機織りが出来ない嫁は軽井沢の飯盛女郎であったものだ。

女郎にわらじことわるかるいさわ

(せつくな事く) 明七・仁・四)

旅立ちのために女郎が用意してくれた草鞋を断る、そんな光景のある軽井沢である。

かるい沢どぶぎげんにて行ところ

(うわ気也けりく) 明七・義・五)

軽井沢は江戸吉原のおはぐろどぶにある鉄砲店に行くような気分で行く場所である。軽井沢はとても不機嫌な時にうさ晴らしの為に行く場所である。あるいは、清酒ではなく濁醪を飯んだ勢いで行くところである。

きぬく手に綱かいくるかるいさわ

(能かけんなりく) 明七・礼・五)

後朝の別れ時、馬を引いて行く人を見送る軽井沢である。

45 かるい沢たても村をかたふける

(ひらき社すれく) 明八・満・二

村の有力者が軽井沢の飯盛女郎に入れあげ、結果として村が成り立たなくなってしまう。傾城ではなく、傾村である。

46 馬を買程てうけ出スかるいさわ

(思ひ社すれく) 明八・松・三

馬の値段と同程度で飯盛女郎を請け出す軽井沢である。身請けのための費用を馬の値段という点が面白い句である。

47 かるい沢外にちそうの無イところ

(手から次第にく) 明八・仁・六

軽井沢は飯盛女郎の他にはこれといって名物のない所である。

48 客さまなそべらつしやいとかるいさわ

(ぜひにくとく) 明八・義・四

お客さん、横におなりなさいとすすめる軽井沢の飯盛女郎である。お客に床をすすめる方言におかしみを感じる句である。

49 こいたごて文つかひするかるいさわ

(むつましいことく) 明八・信・三

飯盛女郎が客に送る手紙を肥桶を担いだ者がおこな

う軽井沢である。
うけ出スとあら事をするかるい沢

50 (おし合にけりく) 明八・鶴・二

身請けすると一変して荒々しい行為をする軽井沢の飯盛女郎である。

51 かるい沢ふだんにのちの月のやう

(気のはれたことく) 安元・宮・二

軽井沢では吉原遊郭で後の月に登楼した時のように、普段でももてるものだ。

52 かるい沢せつかい程の袖をふり

(見へわかぬことく) 安元・桜・五

軽井沢の飯盛女郎の着物は粗末なものであり、切越ほどしかないう着物の袖を振っていることだ。

53 おりよ買ってくれさつしやいとかるい沢

(いやか上にもく) 安元・義・五

私を買ってくださいと願う言葉もお国言葉である軽井沢である。

54 させる外いけのふの無イかるいさわ

(いやか上にもく) 安元・義・八

性交以外何の芸もない軽井沢である。
風呂敷を着てやうなかるいさわ

55 (まかり社すれく) 安二・信・四

風呂敷のような粗末な着物を着ている軽井沢の飯盛女郎である。

56 ぞうろりをかたりなさるとかるい沢

(むこひことかなく)

安二・亀・二

浄瑠璃をお語りなさいというのにもお国言葉である
軽井沢の飯盛女郎である。

57 大津糸に事ならさるハかるいさわ

(見事也けりく)

安三・仁・六

大津絵に描かれる女性のよう飯盛女郎が出る軽井
沢である。

58 こゑたごて文つかひするかるいさわ

(はやり社すれく)

安四・仁・五

飯盛女郎が客に送る手紙を肥桶を担いだ者がおこな
う軽井沢である。

59 客さまのうでがなるにとかるいさわ

(いたつらなことく)

安四・智・六

腕が鳴ると、床の場面ではふさわしくない言葉をつ
かう軽井沢の飯盛女郎である。あるいは、客の腕をも
てあそんでいる姿を匂にしたものか。

60 布子かいどりてひらしやるかるいさわ

(くりかへしけりく)

安四・鶴・四

木綿の綿入れをつまみ上げ、振っている軽井沢の飯
盛女郎である。

61 かるい沢いかい百姓ぶつつぶれ

(もしやくとく)

安四・鶴・五

軽井沢で放蕩した多くの百姓が身上を潰している。

62 かるい沢太夫もへ立ツあかねうら

(まこと也けりく)

安四・亀・三

軽井沢の太夫は燃え立つのような茜裏の着物を着て
いる。

63 馬をつらせて見へをするかるいさわ

(つゝみ社すれく)

安五・仁・四

馬の手綱を引いて見得をきる、そんな軽井沢である。
茶や馬宿がついて来るかるいさわ

64 茶屋に上がるのに、馬宿がついてくる軽井沢である。

65 かるいさわさいごう深キ身と生れ

軽井沢の飯盛女郎は罪業(在郷)深い身として生ま
れたものだ

66 かるい沢からつれて来て村かもめ

軽井沢から身請けした女を連れてもどり村に騒動が
持ち上がる。

67 ぶこつ成ルけいせいの出ルかるいさわ(安七・満・壹)

不作法な傾城が出てくる軽井沢である。

68 かるい沢銭にあかしたくしをさし

軽井沢の飯盛女郎は銭(金ではなく銅で作った赤い
櫛)にあかした粗末な櫛をさしている。

69 ばひせんをばたらくとかるいさわ(安七・仁・四)

ばたばたと音を立てて給仕をする軽井沢である。

70 骨ぶとなしんそうをかうかるい沢(安七・信・五)

田舎女らしく骨太な飯盛女郎を買う軽井沢である。

71 そのいぬぬ三ミせんをひくかるいさわ(安八・天・二)
句意未詳。

72 かるい沢ぬまたはこのす切なり (安八・仁・六)
軽井沢は沼田タバコの素切りが出てくるような場所柄である。

73 かるい沢いなかにぎやうの有ところ (安九・満・二)

軽井沢は田舎ではあるが、面白味がある場所である。

74 麦さくてはらひなさるとかるい沢 (安九・信・二)

麦の収穫が済んだら、借金を返済しろという軽井沢である。

75 かるい沢あふめを庄やねたられる (安九・信・三)

軽井沢の飯盛女郎に青梅縞の織物を庄屋はねだられる。

宝暦七年から安永九年までに行われた川柳評前句付万句合の勝句刷の中から軽井沢の名を含む勝句を見てきた。

これらは、茜色・木綿の着物に象徴される、軽井沢遊女の風俗を題材とした1・4・11・52・55・60・62・68の句、先ほどまで田植えをしていた等という、やや誇張された田舎の宿場女郎の有り様を題材とする、2・5・7・8・17・35・36・50・54・67・70等の句、鄙びた田舎言葉を可笑しみとする23・48・53・56・74等、中山道の宿場町としての特徴を題材とする句からなっている。ここで扱われているのは、江戸と比較される田舎の宿場町であり、江戸の遊女と比較される飯盛女郎である。こうした句が示しているものが十八世紀の江戸に生活する人々の

軽井沢に対する認識であり、また軽井沢に対する興味であろう。

三 『辯道中粹語録』と川柳

『茶話辯道中粹語録』に描かれる軽井沢とは一体どのような場所だったのだろうか。この洒落本と川柳との関係については、西原柳雨氏の「川柳から試みた『軽井沢道中粹語録』の解説」(『江戸時代文化』第三巻第五号)を初めとして、水野稔氏の『黄表紙洒落本集』(日本古典文学大系)の頭注等に於いて既に指摘がなされているのであるが、先に示した勝句を基にもう一度川柳との関係を確認してみることとする。

『茶話辯道中粹語録』の冒頭は旅人の嘉兵衛と供の伊助が馬士に案内されて、宿屋を訪れる場面から始まる。軽井沢は言うまでもなく碓氷峠をひかえた宿場町であるため、この地名から馬士・馬を連想することは当然のようであり、勝句にも30・44・46・63・64のような句がある。

馬士の案内で宿泊することになった宿屋で嘉兵衛と伊助は江戸者の女中さきの世話になることになるのだが、このさきという女中は訳ありの女として描かれており「私も久しくお江戸におりましたがちつとした事で今こんな所イ来ております」と江戸を離れ流れ着いた場所として軽井沢を描いている。後に女郎苺も父親の道楽のため、諏訪世郷から「こんなア所」へ来ることになった言う。地方の賑やかな宿場町として軽井沢を描くのであるが、そこはまた、女性にとっては6の句の如く「女めうり

のつきた所」なのである。

この後、年増の遊女苧藻と新造浮草の二人が座敷に入ってくる。それぞれ

苧藻

年二十四五と見へ黒もめん紋付の布子も、色のもめんうらふき二寸ばかり出し出したるを着て花色太織のは、のせまき帯をしめさせる手に持ながら来る下着は三つ四つ着たやうに見ゆれども皆えり斗とち付た物に、なり是此所の風俗とみえ

浮草

年十八斗花色もめん惣もやうにあかぬらの踊入屋座のもめん帯を尻こけにし、て是又えりは四つ五つの着たやうに見へざしきへこは、出て片ひざ立てすはる

ほんに瘡瘡といへばお前のつむりはとんと瘡瘡疾のやうじ

やわい **うき** あぜへ **加** 櫛もかうがいもみな赤いさ

かひにさ

という出で立ちなのであるが、こうした「キセル」(17)を持ち、

「あかね色」(1・4・62)の「木綿」(11・60)の布子を着て、

頭には赤い櫛や笄を挿している(68)風俗が、江戸の人々が軽井沢の飯盛女郎を連想する時のイメージなのであろう。

女郎との会話はお国なまりの言葉(23・48・53・56・74)がかみ合わず笑いを誘う。

杯ごとがあつさりとすみ、酒の肴へと話がすすむ。肴は卵と決まるのだが、下戸の嘉兵衛の椀の中にはぼた餅が入っている。

このぼた餅、浮草の好物とみえて嘉兵衛に進められると「手づかみにしてくふ」という有様である。軽井沢と卵については、39のような句があり、また、ぼた餅に関しては5・25の如き句が

ある。信濃者と大食いとを結びつける発想は、この時期の江戸ではもはや常識であり、先に示した句の中にも13の如き句がある。

風呂に入り、食事が終わると、床の場面へとすすむ。

床を **あいだを仕切らずはわるうござりませうネ** **加** ウ、ま

んざらではないなもんじやナ **さ** 左様なら斯いたしませう

戸板を願にして仕切ル

割床を戸板で仕切るといふ独特の方法は31の句に確認できる。

かる そんだらゆるさつしやりましどうでハアお江戸サの

女郎衆のやうに何もおもしろへ事アおさんねへが其代にやア **寝て見さつしやりまし天竺までも持あげて見せますへ**

うき わしやアハア帯所じやアおさんねへコレ見さつしや

りまし丸裸で居申お江戸の女郎衆なじみにならねへけり

やアおびさアとかねへさうだがわしらアハア三味のウかぢる事

もならず江戸ぶしナア知らず何も面白へ事アおさんねへかは

りに床サ這入ちやア勤とやらアおつはなれて女夫達だモシ

さして名物のない軽井沢において、遊女たちの素朴な働きは宿場を支える力となっていたのであろう。47の句で「外にちそ

うの無イところ」とし、また、54の句では「させる外いけのふのない」とする。ただ、「サアお前がたそべらつしやいましな」(48と同想)と誘う遊女たちとの素朴な遊びが、24の句の「むくつけなくておもしろし」、73の句の「いなかきやうの有ところ」と肯定的に表現される要因となつていと思われれる。

この後、隣座敷へと場面が移る。口舌から仲直りと続く客と女郎の会話は軽井沢らしく信濃者の田舎客と女郎の方言を使つて交わされるものとなつているのであるが、こうした趣向自体はこの期の洒落本としては珍しいものではないであろう。

最後は、これも定型化した後朝の別れならぬ、後朝の旅立ちで締めくくられている。

川柳との関わりから、『軽井道中粹語録』を再確認してみた。既に多くの先学によつて指摘がなされていることではあるが、この洒落本が、当時の江戸の人々(読者)の中にある共通の認識によつて成立していることは間違いないし、その内容に特段に新しさを読み取ることが不可能である。田舎言葉を笑い、田舎の風俗に可笑しみを感じる。一方で、登場する田舎者遊女の素朴さに対しては好意的な雰囲気すら感じるのである。

四 川柳に於ける浅黄裏

では次に、序の中にも記される「浅黄裏」について見ていくことにする。

浅黄裏とは言うまでもなく、遊里に於いて、野暮な行いをす

る江戸勤番の田舎侍のことである。『茶話道中粹語録』の中には登場していないが、明和・安永・天明期の滑稽を扱う文芸の中にはなくてはならない存在であり、『川柳評万句合勝句刷』の中にも多くの句を見いだすことができる。明和二年(二句)、明和四年(五句)、明和五年(七句)、明和六年(七句)、明和七年(九句)、明和八年(十九句)、安永元年(二十句)、安永二年(二十一句)、安永四年(八句)、安永五年(六句)、安永六年(四句)、安永七年(十五句)、安永八年(十六句)、安永九年(五句)の句が確認できる(各勝句についてはの末尾に参考として記しておくのでご参照願いたい)。

明和の始め頃から確認でき、明和八年以降爆発的に句数が増加している。明和七年に刊行された『辰巳之園』⁵⁾には

お国衆とみへて。花色小袖に、浅黄裏を付。洗ひはけたる。
黄むくの下着。黒沙綾の帯に。郡内縞の袷羽織に。海黄の裏を附。袖頭巾をぴらくとかむり。尻をぢんくばしよりにして。き木綿の足袋に。わら草履をはき大小を門指にさして。もへ黄羅沙の。柄袋を掛けて。

という新五左エ門という田舎侍が登場するのであるが、ちょうどこの時期から浅黄裏を扱う句が増加することは注目に値するのであろう。

田舎侍に関しては浅黄裏の他にも『辰巳之園』に出てくる「新五左」の他、「武左」等の呼び名もあり、これらを含めると川柳

に描かれる田舎侍を扱う句の数は相当なものになる。江戸に住む都市生活者が笑の対象として、これら田舎侍を取り上げていたことは事実と考えてよいであろう。

五 川柳の笑いについて

そもそも笑い（嘲笑）とは、笑う側と笑われる側が一体感を持つていたなら発生しえないものである。この笑いは、絶えず両者の緊張関係の上に成り立っている。例えば笑話の中には、田舎の、ある地域全体を愚か者とする所謂愚か村話という話群がある。以下のような咄がこれに当たる。

あるひくにふろたけとおほせらるゝ。百しやう共あつまつて、たぎいれ申。しんさうすおほせられ候は、ちと、てうすのこをまいらせよとおほせられた。やまかのものにて、てうすのこといふ物をしらす。俄によりあひをして、此よしかくとひやうはんして、たれくもしらぬといふ。とかくおそなわりては大事にて候と申。中にもとしよりたるもの、申やうハ、きつとおもひいたしたる事の候とてまかり出、てうすのこハ先年のいらんにみな、たいてん仕たると申。しんさうすきこしめし、さてくうつゝなきことやとおほせければ、そのうつゝないも一度にうせたと申あげた。

（『きのふはけふの物語』寛永頃成立）

こたつ

とある在所に、身上よろしきもの、こたつをこしらへけるに、村中つゝにこたつを見たる事なけれハ、めつらしくおもひ、となりの与次兵衛殿の所には、畳を四角にぎり、四本柱をたて、くみ天井をしらるゝ、あれは何じやとて見てゆきけるが、跡よりゆきたるものかへりて、ざん念な、おそかつた。もはやふとんをかけて見せなんだ。

（『軽口春のやま』明和五年刊）

手水の粉（洗面に使う洗い粉）や、炬燵を知らない田舎の愚か村・愚か村に住む人々を笑っている咄である。

見知らぬ土地が多く存在した頃は、見知らぬ人々の言動はそれだけで緊張感を持つて受け止めなければならぬものであった。この緊張感を弛緩するために、見知らぬ他者を笑い飛ばすことが求められ、笑いは悪意に満ちたものになりがちであった。ただ、近世も半ば頃になると、見知らぬ土地自体が身の回りに存在しなくなり、地域全体をこうした嘲笑の対象とする必要がなくなっていくのである。結果として風刺・嘲笑の対象は、より身近な場所に存在する、江戸の都市生活者とは違う生活・服装・言葉・考え方等をする者に向けられていくことになる。それが浅黄裏・武左・新五左であり、田舎出のお信・お三・権助なのである。

安定した世の中では、より身近なものを笑いの対象とする一

方で、訪れたことのない土地であつても人々の生活は一般化していると思えるようになるため、他国・他国に生活する者に対する警戒心は薄れ、かえつてその土地・その土地に生活する人々に対して興味を抱くようになるのである。

江戸の都市生活者にとつて、軽井沢は既に緊張感を持つて対峙しなければならぬ異境の地ではない。身近な場所です江戸者の笑いの対象になつてゐる田舎者が生まれ育つた場所、中山道にある娯楽の場所であり、のどかな愚か村なのである。

このように見ていくと『辯語道中粹語録』は洒落本の舞台が吉原から深川へ、深川から品川へ、品川から新宿へと移つていく自然な流れの中で、設定されたものであり、この洒落本を生み出す空気は他の遊郭と同様に川柳等によつて既に江戸の街にできあがつていたと思えるのである。そういう意味では軽井沢を舞台とする洒落本が書かれた背景は序に記される如く川柳に追うところが大きいと言えよう。軽井沢を愚か村になぞらえる趣向があつたことも確かなように思える。

六 その他

本論考の最後に通について一言付け加えておく。『辯語道中粹語録』の序題は『変通軽井茶話』であり江戸の美意識を象徴する「通」を書名に取り込んだものである。序文中にも「通のぬし」「大通変じて変通にいたる」の言葉が確認出来る。では「通」とは、「変通」とは、何か。

今回の考察で用いた宝曆から安永期にかけての川柳評の勝句には「通」の用例が驚くほど少ない。「通り者」にまで範囲を広げても『遊子方言』が刊行されたと考えられる明和七年頃までの勝句には多いのであるが、それ以降は数句程度の選句にとどまつてゐる。これら川柳に描かれる通り者のほとんどは『遊子方言』に登場する如きの半可通であり、理想的な「通」を描く句ではない。こうした傾向は、単に川柳だけではなく、同じような滑稽を扱う咄に於いても同様なのである。

「通」を描く戯作が数多く出版された明和期以降、川柳・咄に、通もしくは、その反対に位置する半可通が登場しないのはなぜか。笑いの対象にならない、通という言葉の不安定さを示しているのだからか。通という美意識が文芸の世界においては小説に類するジャンルに於いて主に追求されたことだけは確かなようである。

【注】

- (1) 拙稿「息子考」(『豊橋創造大学紀要第八号』平成十六年二月二十三日刊)
- (2) 以下の『辯語道中粹語録』の引用は『洒落本大成』第十卷(中央公論社 昭和五十五年十月十日刊)に拠つた。
- (3) 『黄表紙・洒落本の世界』(岩波書店 昭和五十一年十二月二十日刊)
- (4) 以下の川柳の引用は『川柳評万句合勝句刷』1~10(川柳雑俳研究会 平成五年五月二十日~平成八年四月二十日刊)に拠つた。なお漢字は原則として新字体に改めた。

(5) 『辰巳之園』の引用は『洒落本大成』第四卷(中央公論社 昭和五十四年四月十日刊)に拠った。

(6) 以下の咄の引用は『噺本体系』(東京堂出版 昭和六十二年六月三十日刊)に拠った。

【参考】

浅きうらろじで引ツつり引ツはられ(明二・宮・三)
ぎうく浅キの裏の客かよび(明二・仁・六)
ぢん笠てつミ草に出ル浅きうら(明四・梅・五)
手くだとハなんのこつたと浅黄うら(明四・義・九)
是あねいまめかとそゝる浅きうら(明四・礼・拾)
御身たちハ気がゆかぬかと浅きうら(明四・礼・拾)
十三日浅黄にしるとしかられる(明四・智・三)
わこれめハなんぞときめる浅きうら(明五・宮・三)
気がよけりやろまくらひする浅き裏(明五・梅・四)
式銭ンつゝかと真崎で浅きうら(明五・桜・五)
よみうりの通りに諷ふ浅黄うら(明五・松・五)
四ツ目やていりわけをきく浅きうら(明五・義・五)
どのうらへ行ツてももてぬ浅きうら(明五・礼・六)
ときついをすい付ケて出スかるいさわ(明五・亀・二)
くろぶしの見へるてそゝる浅きうら(明六・梅・三)
浅きうら茅場のやくとさそひ合(明六・桜・三)
両かわを十丁あるく浅きうら(明六・松・四)
どつざりとざるへ打チ込ム浅きうら(明六・仁・四)
浅きうら五十銅がのちぎりに出(明六・礼・四)
ちよき舟へとかまつて居ル浅きうら(明六・礼・四)
浅きうら出しなに式珀いたぶられ(明六・信・四)
是君よおすなとそゝる浅きうら(明七・桜・三)
四郎兵衛か内迄のそく浅きうら(明七・仁・四)
浅きうらきやつにいたそうなとゝいゝ(明七・仁・五)

切り見せを諷でそゝる浅きうら(明七・義・五)
出シかけた錦絵を買浅きうら(明七・義・六)
はぜ釣りに夜ぎりはらつて浅きうら(明七・礼・五)
あまつ子のやうなにはまる浅きうら(明七・礼・六)
浅きうらはしよつてかけるおふまつ(明七・信・三)
是姉へそうせぬものと浅きうら(明七・信・四)
山下やうねめへからむ浅きうら(明八・満・二)
引力れるとそのくせびゝる浅きうら(明八・満・二)
横平に根津をきく浅きうら(明八・宮・三)
また出来ぬ顔へしかける浅きうら(明八・桜・四)
田舎色あかねと浅きまくり合(明八・桜・五)
しん以て町のものざと浅きうら(明八・桜・五)
むだおへの見ン料を出ス浅きうら(明八・桜・五)
大きくせつだまりめざると浅きうら(明八・松・四)
ふられてハ武士かたゝぬと浅き裏(明八・仁・五)
よらづかへなとゝふらつく浅きうら(明八・仁・六)
中の丁こわくあるき浅きうら(明八・義・四)
やうし見せ浅きか立ツとへらほうめ(明八・義・五)
窓を喰ふよふに見おくる浅きうら(明八・義・六)
浅きうら男禿を見そこない(明八・礼・七)
浅きうらろじ迄刀さけて出る(明八・智・三)
国家老殿と浅きをバに来る(明八・智・四)
女にハ御ゑんつたなき浅黄うら(明八・智・四)
浅きうら茶釜の見世のふ吉なり(明八・智・五)
ひよろつかあこうけいを出ル浅きうら(明八・信・三)
長うたをくんどくにいふ浅きうら(安元・天・二)
浅きうら色にハいつこぐとんなり(安元・満・二)
浅きうらいらぬ地ものをきらい事(安元・宮・三)
ふられてもしやにむにかゝる浅きうら(安元・宮・三)
はこねから無イとハいへと浅きうら(安元・梅・三)
浅きうらしら店迄もそゝるなり(安元・梅・四)
ま一ちへんまわらまいかと浅きうら(安元・桜・五)

いらわせひ百おかすやと浅キうら (安元・松・五)
 浅きうら揚家へ来て八日を暮し (安元・仁・五)
 切り見せの手足からミハ浅きうら (安元・仁・六)
 ぎんなんがさぞなろうとの浅きうら (安元・仁・六)
 やうじ見世浅きくらすわすまねをされ (安元・仁・六)
 かけ声がひくけりや浅きかてんせす (安元・仁・七)
 浅キうら聞く土手へやつと出る (安元・義・六)
 くいついてくれろとたのむ浅キうら (安元・義・六)
 あたる事ばつかりをいふ浅きうら (安元・礼・三)
 だまり坊是さとたく浅きうら (安元・礼・四)
 こぶとりの有に浅キハけつをけし (安元・智・二)
 何もかもで居ルハなと浅黄うら (安元・信・三)
 浅キうらやわらでぎうをきつく也 (安元・信・三)
 浅きうらてんつるてんを着テあるき (安二・七・五)
 紙花ハ浅きぐあんに落ぬなり (安二・天・二)
 石うすにこびつて居る浅きうら (安二・天・二)
 浅きうらほうづりをしてしかられる (安二・宮・二)
 丸ごしハ能イかやつはり浅きうら (安二・梅・三)
 たのしんでいんせすかへる浅きうら (安二・梅・三)
 罷越シさんと浅きへ名をつける (安二・礼・三)
 浅きうらろじからひよくらく出る (安二・礼・三)
 われ斗りふんとしをとく浅きうら (安二・松・三)
 浅きうらつまんたしりへ小百遣り (安二・松・四)
 はらあしく浅きハ見たてなをすなり (安二・松・四)
 つんとした女のそばに浅きうら (安二・松・四)
 やうじ見世せんの浅きやわり居る (安二・松・四)
 てうちんで白ト浅きをつかまへる (安二・松・四)
 ひつしよなくされてもかゝる浅きうら (安二・義・五)
 ふみぢつおろそかにせぬ浅きうら (安二・礼・四)
 つまいます時遠く出ぬ浅きうら (安二・智・三)
 かの人トいふのを見れハ浅きうら (安二・智・五)
 もの取りと見へて浅きハもてぬなり (安二・智・五)

浅きうらつるぎのまひのくわん主なり (安二・信・四)
 さし合のあるのに浅きたわむれる (安二・龜・二)
 浅きうら男かぶろをおひまわし (安四・桜・四)
 茶がまのそばへよりたかる浅きうら (安四・義・五)
 さいつごろゑろうしたなと浅きうら (安四・礼・五)
 さしをなげ仕廻ふに浅きまだ居る (安四・礼・七)
 出来もせぬ事に浅ぎのすそを切り (安四・智・八)
 長座いたしたと山下浅ぎ出る (安四・信・六)
 美しさ浅きさしつめ引キつめ射 (安四・信・七)
 あそひすごして浅きうらかけるなり (安四・叶・三)
 浅きをのせてかつ切りを四ツ手喰イ (安五・松・四)
 丸ごしハゑゝが浅きをひらつかせ (安五・智・三)
 どふさるやいなや浅きをまくりかけ (安五・信・二)
 おかみんす浅きにしなとふりつける (安五・信・三)
 衣だにもてるに浅きつらい事 (安五・龜・三)
 夜具のそんりやうを浅きハ三分出し (安五・龜・三)
 浅きうらやうじもないに長居する (安六・五五会)
 おどけなら浅黄にしなと一ツあて (安六・五五会)
 とうとちやらくく浅きをうからかし (安六・礼・八)
 入りごみじやはいらまいかと浅きうら (安六・礼・八)
 ばゝあか茶浅きのんてるにわかあめ (安七・宮・一)
 きらわれるくせに女良を浅き好キ (安七・梅・二)
 ひりくをあらひおとして浅きまち (安七・松・四)
 喰のミはつかりに浅き三分出し (安七・仁・五)
 神楽たういよまうたりと浅きほめ (安七・仁・五)
 もとめれハあいつと浅きすけんする (安七・義・五)
 二十けん目まじろからす浅き居る (安七・礼・四)
 浅きかうたふのが本のまぢうたひ (安七・智・三)
 中宿へ大をあづける浅きうら (安七・智・五)
 浅きうら斗り勘三良といゝ (安七・智・五)
 浅きうらあわれもよふすくれの文 (安七・智・六)
 いらハせい百やらずい (八) と浅きいゝ (安七・智・七)

浅きうら同まくらにふられたり(安七・信・四)
血心もなう四ツ手から浅きてる(安七・鶴・四)
丁がせつしや徳だと浅きハしやれる(安七・鶴・四)
わこれめハなんぞと浅黄大くぜつ(安八・琴・二)
十九間ノ程ハ浅黄ておつふさぎ(天八・天・二)
むらさきハきでん浅きハ身どもなり(安八・宮・三)
浅きうらちぎられるたけちぎるなり(安八・梅・三)
うりものをいしるて浅きふられたり(安八・梅・四)
出スまじき所て浅きハ武士を出し(安八・梅・四)
やく所とハ身がうわさかと浅きうら(安八・仁・六)
ゑに書いたもちにひこつく浅きうら(安八・仁・六)
あのいてうなん年程と浅きぎゝ(安八・義・六)
ぶくゝをしてくれおれと浅きいゝ(安八・義・六)
ねふつたら御めんと浅きばかにされ(安八・義・八)
あわれまくらにとひも来す浅きてれ(安八・礼・四)
浅きうらまくつて四ツ手ふんまたき(安八・礼・十)
びくのおるろじハどれもしやと浅き裏(安八・礼・十)
矢銭ンおしますさんゝに浅きいる(安八・智・六)
かつしても浅きばゝあの茶ハのまず(安八・信・四)
やるかして浅きノミおれさそうなり(安九・義・四)
どこておぼへたかあさぎハきゝすなり(安九・礼・六)
けいせいに浅きいこんをさしはさミ(安九・智・四)
次に出ますハ拙者と浅きしやれ(安九・信・三)
たつた一ちばんさせたよと浅きいゝ(安九・信・三)